川崎市青少年科学館紀要，(25): 21-26, Mar. 2014

アイヌ民族や琉球民族の星座や星名について

成瀬裕子*

Star names in Ainu and the Ryukyus

Yuko Naruse*

国内に伝わる星座や星名を調べ、国内の複数地域における星座や星名の比較を試みた。また、その一部を、当館の2014年5月度のプラネタリウム一般投影「沖縄の星、北海道の星」で紹介した。

1. 背景

現代で使われている星座にはギリシャ神話由来の星座が多く、プラネタリウムなどでの星座の解説においても、ギリシャ神話が紹介される機会は少なくない。しかし世界各地には、様々な民族が生み出した、その民族固有の星座や星名が伝わっている。そこで、ギリシャ神話以外の解説話題を集めることを目的に、日本に伝わる星座や星名をテーマとした調査を行った。

2. 調査対象と方法

日本は、地理的に南北に広がった国土をもち、気候も文化も多様であるため、星座や星名でも、相応の地域差が表れると予想された。そこで今回は、北海道と沖縄の2地域を対象に調査を行うことにした。これらの地域の概要は以下の通りである。

1) 北海道

北海道は日本の北部に位置し、北海道の北端、宗谷岬の緯度は北緯45.5度である。(なお、当館が位置する神奈川県川崎市多摩区は北緯35.6度である。)

亜寒帯地域で、気候は冷涼低湿であり、多くの地域では冬が長く、寒さが厳しい。

2) 沖縄県

沖縄県は日本の南西に位置し、一年を通して温暖な気候の亜熱帯地域である。なお、日本の最南端は東京都に属する小笠原村（小笠原諸島）の沖ノ鳥島、北緯20度であるが、サンゴ礁の小島で上陸はできず、人は住んでいない。沖縄県（琉球列島）で、人が住むもっとも南の島は北緯24度の八重山諸島波照間島で、日本の最西端で同じ八重山諸島に含まれる与那国島（北緯24.4度）とそれほど緯度は変わらない。

北海道や東北、ロシア沿海州に昔から暮らしていたのがアイヌ民族である。「アイヌ」とは本来「人」を表すことばであり、動物や植物、自然現象などあらゆるものに宿るのが「カムィ」、それに対する「人」が「アイヌ」である。アイヌ民族は、自然に感謝しながら共生するという自然観を持ち、独自の文化を形成してきた（末岡, 1979; 2009)。

北海道の星座や星名については、アイヌ民族に伝わるものを取り上げることとした。アイヌ語の星名は、参考文献に挙げた文献より星座や星名を抽出し、まとめることとした。

沖縄の星座や星名については、アイヌ民族と同じく、沖縄地方で独自の文化を形成してきた琉球民族の伝承を取り上げることとした。しかしながら、星の記述がある書籍や資料の入手が困難であったため、沖縄星観の会編(1995)の他に、野尻（2002）や、渡邊他編（2008)を参照した。

また、今回の調査では季節を限定し、初夏の頃に見られるおおぐま座、こぐま座、北斗七星、うしかい座、からす座、おとめ座付近を対象とした。北海道と沖縄の各地域の中で、更に複数の星名が伝わっているものについては、全ての網羅は難しかったため、現代の星座と比較しやすいものや代表的なものをいくつか選択した。

3. 北海道、沖縄に伝わる星座と星名

以下に、現代に伝わる星座や星名の例を挙げる。

表1. アイヌ語と沖縄の天体の呼称.

	アイヌ語	沖縄
星	ノチゥ、ケタ	ホシ、フシ、ブシ
太陽	チュプ	ティダ
月	クンネチュプ （暗い　天体）	チチ、トートー
天の川	ペッノカ （天の河）	ティンガーラ （天の河） アマヌホーラ （天の河）

＊川崎市青少年科学館（かわさき宙と緑の科学館）
＊ Kawasaki Municipal Science Museum

表 2. アイヌ語と沖縄の星座・星名の例.

アイヌ語	沖縄
北極星 偉大な　星 ポロ　ノチゥ 偉大な　星の　守護者 ポロ　　ケタ　エプンキ	**北極星** 子の方の　　星 ニィヌファ　ブシ 北極星を、北の方角、あるいは子の方角の星と呼ぶ。 北極星になった子供＜民話＞ 女神が、優しく勇気のある少年を、世の中の人々の手本になるようにと北の空の北極星にしたという。 てぃんさぐぬ花＜民謡＞ 沖縄島（沖縄本島）に伝わる民謡。歌詞は十番くらいまで伝わっているが、「星の数は数えようと思えば数えられるが、親の教えは数え切れない」、また、「夜の海をゆく船は北極星を目当てに、私を生んだ親は私を目当てに」といった歌詞がある。
北斗七星 七つの　明るく輝く　星 アルワン　トマシヌ　ノチゥ 銀　　の輝き　を持つ　七つ　　星 シロカンニ　ヌペキ　　コロ　　アルワン　ノチゥ 尾の長い　　熊　　の姿をした　星 シアラサルシ　カムィ　　ノカ　　ノチゥ ギリシャ神話との類似がある。 サマエンの　星 サマエン　　ノチゥ 「熊を追って木に登るサマエンの姿の星」。アメリカのネイティブインディアンは、北斗七星を熊と三人の猟師に見立てたが、アイヌにも熊を追う星名がある。 矢　　星　　弓　　星 アィ　ノチゥ、　　ク　ノチゥ αUMa、βUma が矢、残りの星で弓に見立てる。 舟　　星 チプ　ノチゥ 舟　の形をした　星 チプ　ノカ　　ノチゥ αUMa、βUma 以外の 5 つで舟の形を描いた。	**北斗七星** 船　　星 ウフナ　ブシ 時刻によって位置が変わる北斗七星は、舟の位置や時刻を知る目印になったことだろう。 ※沖縄島では唐船道星　・　柄杓七つ星 トーシンミチブシ　　ニーブナナチブシ

輪踊する　星
ウポポ　　ケタ
輪になって踊る女性の姿。空をぐるぐる回っていく様子がよく表現されている。川崎では冬の北斗七星は沈むが、北海道では北斗七星は周極星となり、冬も見られる。

農耕　　から逃げる　星
トィタクル　サオッ　ノチゥ
働かない娘たちが逃げる姿。アルコルは背負われた母。

上向きに寝たカムィ の姿をした　星
クッコト　　ノカ　　ノチゥ
下向きに寝たカムィ の姿をした　星
ウプシ　　ノカ　　ノチゥ
北斗七星をカムィ（神）と見ることもあった。冬の北斗七星は、雪の大地にあおむけに横たわるカムィの姿。夏のカムィはうつぶせである。

アルクトゥールス

赤い　キツネ
フレ　スマリ
アイヌ語でキツネ（キタキツネ）をチロンヌプやスマリと呼ぶ。フレ、は赤。赤い毛皮のキツネはいたずらものだったという。

かんむり座

首飾り　　星
タマサィ　ノチゥ

スピカ

オオカミ　　星
ホロケゥ　　ノチゥ
母オオカミが空にいる姿。

からす座

風　　口（くち）
レラ　チャロ
からす座の四辺形を「風の吹き出し口」と見る。四辺形が東に上る頃東風が、西に沈む頃西風が吹くというように、季節によって違う風向きをも示している。アイヌの人々が自然現象をよく知り、自然とともに生きてきたことがわかる。

七つ星の娘＜民話＞
まずしい男のところへ娘がやってきて、二人は幸せな夫婦になったが、娘はミザールだったので空へ帰ったという民話。アルコルは男と娘の間に生まれた子供の姿で、地上の夫からよく見えるよう、娘がそばに置いているのだという。

からす座

臼太鼓　　星
ウシデークバボシ
那覇市（沖縄島）に伝わる呼び名。沖縄の民族音楽で使われる、臼（うす）に似た太鼓の形に見たものだろうと野尻(2002)が書いている。

レグルス
月を　知る　もの　＝月の知人
アムキル　　クル
レグルスは黄道上にある。そのため月が近づくことも、月に隠される（星食）こともアイヌの人々は知っていたことがわかる。

プレセペ星団
ねずみ　の倉
エルムンプ
アイヌの人々は日食を、太陽が病になったり悪魔に食べられたりしていると捉えていた。「昔、太陽のカムィが悪魔に食べられそうになったとき、ネズミがそれを助けたため、ネズミは空に住むことが許されている」という民話が伝わっている。エルムンプの見え方で、今年はネズミが多いかどうか占うこともあった。

すばる
七つ　　星
アルワンノチゥ
「働かない怠け者の星たちが　働き者の若者（オリオン座の三ッ星）に追いかけられている」という伝承による。人々はアルワンノチゥを見て、鮭が川を上る季節を知り、冬支度をした。

南十字　αCen、βCen
南の　　星
ハイカプス　、パイガプシ
みなみじゅうじ座は本州では見づらいが、波照間島では12月～5月頃に見ることができる。沖縄島ではハイカプスと呼ぶ。種まきの季節を知らせる星でもあった。

すばる
群れる星（群れ星）
ムリカブシ、ムリブシ、ムリブシ、ンニブシ
「天の王様が、北のななつ星（北斗七星）、南のななつ星（南斗六星）、そしてムリブシ（すばる）に島を治めよと命じた。 北のななつ星、南のななつ星はそれを嫌がったので空の隅に追いやられたが、ムリブシは島を治めるために天の真ん中をゆく。農作をする人はムリブシを見て種まきの季節を知る」という民話がある。実際に、北緯24度の波照間島では赤緯24度のすばるが南中する際の高度はほぼ90度になり、頭上を通過するため、まさに天の真ん中をゆくように見える。（北緯35度の川崎でのすばるの南中高度は78度である）。5月初旬、ムリブシが宵の西天に沈むと梅雨入りを、6月下旬、暁の東空に顔を出すと梅雨明けを知らせる目印ともなった。琉球の海人（うみんちゅ）がニィヌファブシを航海の目印にするように、農民はムリブシを農作業の季節の合図にしていた。

付）異世界
地下の　世界
ポクナ　モシリ
アイヌ民族は、西の方の地平の下に、地下の世界「ポクナモシリ」があると考えた。

さそり座
魚釣り　　星
イュチャー　ブシ
魚釣りの針に見立てる。アンタレスがよく見えると魚が釣れる、と漁師の間で伝わっているらしい。

付）異世界
ニライカナイ
沖縄では、水平線の海の彼方や海底・地底に、豊穣をもたらす元郷とも、死者の魂が赴いたり禍なすものを送り込むともいう「ニライカナイ」があると考えた。

まず音の印象として、アイヌ語は、北海道の地名などで耳にする機会はあっても、現代の私たちが音で聞いただけでは意味はつかみづらいものが多い。第一印象としては「意味はわからない、他言語のことば」といったものになるだろう。一方沖縄のことばは現代の私たちが使う日本語にも通じる音が多く、地方の「なまり」のように言葉の意味が推測しやすいものもある。

2つの地域の星座や星名の比較を試みると、各地域ならではの特色が現れているもの、また、地域が違っても類似性が感じられるものの両方があることがわかる。

星の名付け方を分類すると、2地域の両方において、

・よく目立つ、慣れ親しんだ星への命名
・見立て（星を結び、神の姿や人、動物、身近な道具などに想像し、名付けたもの）
・生活や季節の目印（気候や季節、自然現象を、日頃から意識し観察しているからこそ生まれた名前）
・民話から派生したもの（民話には、戒めが含まれるエピソードを伴うものも多い）

といった共通点が見えてくる。古代ギリシャをはじめとして、北海道（アイヌ民族）、沖縄（琉球民族）、そのいずれにおいても、人々は古来より星を眺め、観察し、星に名前を付け、背景を想像していたことが窺える。また、想像上の異世界を遠い彼方に意識し、思いを馳せることも共通している。

厳しく豊かな自然の中で生きる民族であればなおのこと、自然への観察眼は敏感で鋭かったはずである。自然と共に生きた人が作った星座や星名に、現代の私たちが触れる時、現代人がどれ程自然と離れているか、人の生活がどれ程変わってきたかも映し出される。その一方で、時代や生活が変わっても、人が星を眺めることは不変の行為なのだということもまた見えてくる。

4. プラネタリウム投影「沖縄の星、北海道の星」

2014年5月度のプラネタリウム一般投影は「沖縄の星、北海道の星」というテーマであった。川崎に加えて北海道と沖縄の2地域の星空を解説すると共に、今回集めた2地域の星座や星名も紹介した。

川崎は北緯35.6度、北海道の北端である宗谷岬は北緯45.5度、波照間は北緯24.0度である。緯度が異なるため、北極星をはじめ、星の高さが変わって見えることになる。また、北海道では、北斗七星は一年中沈まない周極星として見られること、沖縄（琉球）では、みなみじゅうじ座が見られることなどにも触れた。

当館のプラネタリウムでは、45分間の解説中に地球を離れて宇宙旅行へ行く等の演出が日頃からふんだんに使われるが、今回の投影では宇宙に行かず、終始地球上の星空を見る構成であった。そこで、波の音や民族音楽も用いゆったりとした雰囲気を演出しつつ、のんびりと星空を眺めながらも北海道や沖縄（琉球）の文化に親しむという番組とした。観覧者には、リラックスしながら星を眺める、プラネタリウムらしいプラネタリウムを楽しんでもらえたと共に、ギリシャ神話以外にも、多様な民族による多様な星座や星名があると認知してもらえたのではないかと思う。

5. まとめと課題

1）今回、ギリシャ神話以外の星座や星名を多く得ることができた。ギリシャ神話を多く紹介しがちなプラネタリウム解説において、北海道（アイヌ民族）や沖縄（琉球民族）の星座や星名を取り入れたことは、観覧者にとって、また解説員にとっても新鮮な体験になったのでは

ないかと思う。

2) 星座や星名を調べるに当たっては、星の記述がある資料を集めることが困難だった。机上の資料の参照のみで、現地でフィールドワークを行う機会もない場合、星座や星名の正確性の保証をどのように実現するか、また、どのように各地の博物館や科学館と連携できるか、今後の課題としたい。

3) 近年、アイヌ人女性である知里幸恵の「アイヌ神謡集」がNHKの子供番組「日本語であそぼ」で取り上げられたり、同じくNHK「おはなしのくにクラシック」では「アイヌ神謡集」と琉球の歌謡集「おもろそうし」が紹介されたりしている。様々な文化に触れ、文化的多様性を培う意味でも、ギリシャ神話以外にも多様な文化をプラネタリウムで取り上げる意義はあると考える。

6. おわりに

宇宙では、138億年の間、星々が生まれては消え、様々な元素が生み出され、現在までその営みが続いてきた。やがて私たちの地球も誕生し、多様な生命がはぐくまれ、人々は命のリレーを繋ぎ、文化を作り、受け継いできた。

古来からの星座や星名は、何世代もの人々が語り継いで伝えてきたからこそ、現代に遺っている。星座や星名を聞いた時、私たちは受け継がれてきた文化のバトンに自然に触れていることになる。プラネタリウムで来館者に伝えたいテーマのひとつである「宇宙に人間が生存しているすばらしさ」について、天文学のみならず民俗学の観点を持つことは大いに役立つと考えられる。今後も多様な視点を通じ、プラネタリウムでの表現方法を模索していきたい。

7. 参考文献

末岡外美夫, 1979. アイヌの星（旭川叢書第12巻). 365+8 pp., 旭川振興公社, 旭川.

末岡外美夫, 2009. 人間達(アイヌタリ)のみた星座と伝承. 612 pp., 自費出版, 札幌.

野尻抱影, 2002. 日本の星 星の方言集（改版)(中公文庫). 952 pp., 中央公論社, 東京.

伊舎堂 弘・田端研二・比嘉保信・湧川哲雄・宮城幸子/沖縄星観の会（共編), 1995. OKINAWA 四季の星座. 152 pp., むぎ社, 中城.

渡邊欣雄・岡野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克也（共編), 2008. 沖縄民俗辞典. 582+74 pp., 吉川弘文館, 東京.

TV番組

NHK「おはなしのくにクラシック」(2014年度: 第2回)

インターネット情報

「アイヌ神謡集」「おもろそうし」

http://www2.nhk.or.jp/school/movie/bangumi.cgi?das_id=D0005150100_00000（アクセス日時: 2015年3月1日）